



幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

2003

6

第102巻 第6号 日本幼稚園協会

子育て支援と

柏女靈峰 著

(淑徳大学社会学部教授)

保育者の役割



子育て支援に対する保育所・保育者の役割がこれまでになく強調されるなかで、保育所・保育者はどのような子育て支援ができるのか、あるいはすべきなのか。この本では、子育ての現状を踏まえ、保育所・保育者が取り組む子育て支援の意義と具体的活動のあり方について、さらに保育士資格の法定化を踏まえた「保育指導」のあり方や課題について考えます。

●保育士資格の法定化によって子育て支援のあり方を学ぶことが努力義務となり、また現場での手引書として、また保育士を目指す学生に必須となった「家族援助論」の教科書としてもご活用ください。

目次

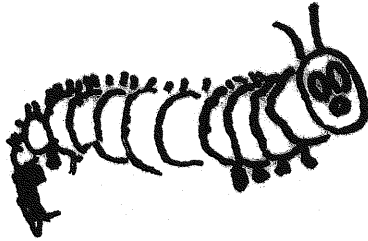
- 第1章 子育ての現状と子育て支援の必要性
- 第2章 子育てニーズと支援の方法
- 第3章 保育所の課題と子育て支援
- 第4章 保育所における子育て支援
- 第5章 保育士資格の法定化と子育て支援
- 第6章 保育所における子育て支援の役割と機能

A5判 176頁 定価：本体1,400円＋税

キンダーブックの
フレール館

幼児の教育

第102巻 第6号



幼 児 の 教 育 目 次

—第一〇二巻 第六号—

© 2003
日本幼稚園協会

巻頭言 蛇行の理由―六月の遊びに思う―……………吉村真理子……………(4)

ポジティブサポートの世界(2)

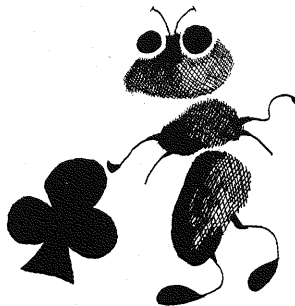
〈その人中心〉という意味を考える……………村田 愛……………(8)

子どもに在る風景(3) 今、子どもたちのあそび場は

―ドイツ・ハンブルク市のあたらしいあそび場―……………小林 美実……………(16)

子どもと笑い(2)……………今井 和子……………(23)

ある日……………(32)



障碍をもつ幼児の保育(1)―この子と出会ったとき―

言葉のない子のコミュニケーション

津守 真・津守 房江・玉木喜美子… (34)

絵本とともに―幼いきょうだいと暮らす―……………藤津 麻里… (43)

木と子どもと遊び……………田中 千尋… (48)

手づくり活動の楽しさをばらしさ(3)……………浜本 昌宏… (55)

子どもからのプレゼント……………佐藤 寛子… (56)

床下……………佐藤 寛子… (56)

表紙絵／南塚 直子

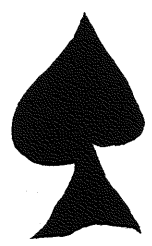
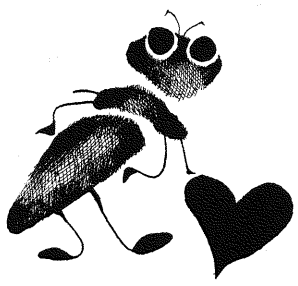
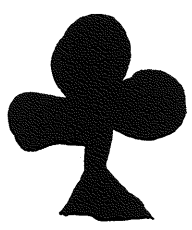
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ

編集委員／田代 和美・高橋 陽子・佐藤 寛子

編集部／仲 明子



巻頭言

蛇行の理由

— 六月の遊びに思う —

吉村真理子



空の旅の楽しみは眼下に広がる風景の変化です。山峡をかけ下っていた川も平野部になるとゆつたりと蛇行して流れています。それを見ていると先頃さる新聞に載っていた山本裕司氏のエッセイの中に紹介されていた俵万智さんの短歌が思い出されました。

蛇行する川には蛇行の理由あり

急げばいいってもんじゃないよと

この歌は俵さんが北海道の釧路湿原を訪れたときに詠まれたそうですが、釧路川の



中流で大掛かりな改修工事がなされ、蛇行部分をカットしてコンクリート護岸の間を真つすぐに流れるように付け替えたため、湿原は年々小さくなり乾燥化の道をたどっているとのこと。当然、湿原に住む動植物は減びていかざるをえません。同じ記事の中に、ある研究機関が実験河川を作り、一方は蛇行し「浅瀬」や「淵」のある川、もう一本は直線の川を作り、そこに住む魚の数を調査してみると、蛇行した川には直線の川に比べ七、八倍の魚が住んでいたと記されていました。蛇行の理由は「生命」を育むためだったのです。



ここまで読むと私たち保育者はこの記事に六月の子どもの姿を重ね合わせて考えてしまいます。

若葉が風に揺れてちらちらとこもれ日を落とす園庭で、子どもたちは四月当初の緊張や不安がうそのようにのびやかに遊んでいます。自分の好きなことをみつけてじっくり取り組んだり、気の合う友達といっしょに遊ぶ楽しさも覚え始めたところでしょう。それぞれの子どもの軌跡はさまざまに蛇行していたに違いありません。

それでも中にはやりたいことが見つからずうろろ歩き回ったり、グループの輪に入りかねて佇んでいる子や友達と意見が合わなかったのか一人離れて相手をにらみつけている子もいます。淵でよどんでいたり渦に巻き込まれてぐるぐる回っているようなものでしょうか。しかし、やがて快調に浅瀬を乗り越え、いつのまにかその子たち



も遊びに加わってきます。面白そうだな、私もやってみたい、でもうまくやれるかなという不安から一步を踏み出せない子どもも、自分の思いどおりにならないとすぐに腹をたてて相手に怒りをぶつける子どもも、そのままでは幼稚園は一向に面白くありません。思い切って「入れて」という決心をするまでにはその子なりの葛藤があり、それを乗り越えさせたのは「みんなと遊びたい」という子ども自身の強い願いがあったからではないでしょうか。

なぜ子どもは遊ばずにはいられないのか、それは楽しく遊ぶことすなわち充実して生きている実感であり、その経験が成長の糧になっているからだと思います。入園して二か月の間、母親や家庭から離れて感じる淋しさ、知らない子どもたちと付き合う不安、慣れない集団生活の窮屈さや欲しいものがすぐに手に入らない不便さを感じながらも、珍しい遊具や玩具に誘われ、年長児たちの遊んでいる様子に魅せられました。今まで家庭では知らなかった魅力的な世界が目の前に広がっているのですから入らない手はありません。

楽しげに遊んでいる今に至るまでの回り道や停滞、ぶつかり合いなどの経験はすべてその子どもの貴重な財産として活かされています。園生活に慣れて好きな遊びを見つければ、友達と出会う仲間といっしょに遊ぶ喜びを味わうためにはどれほどの能力が必要か計り知れないほどです。未知の世界に入り、物や他の子どもたちとどうかかわっていけば心地よい自分の居場所が確保されるのか必死で探し求めてきたにちがいない





ません。その心地よい居場所とは遊びの楽しさを知ることだと思っております。

また、大きくとらえると「遊び」そのものが蛇行する経験と言えるでしょう。「そんなことをしてはだめ」「なかよく遊びなさい」というのはコンクリートの水路のようなもので、最短距離だと思っても子どもの身についた学習にはなりません。

五歳のテッチちゃんは仲間のやっっているお店ごっこに入りたくてたまらないのですが、いつも自分勝手に店を仕切るのだから入れてくれなくなりました。それでもみんなと遊びたいテッチちゃんは考えたあげく、彼の特技である折り紙の手裏剣をたくさん作って箱にいれ「手裏剣はいりませんか」とその店に売りに行ったのです。ちょうど商品のバッグが品薄になっていたので「ぜんぶちようだい」と商談成立。テッチちゃんはまたせつせと手裏剣を折り始めました。瞬く間に手裏剣は売れたとみえ今度はお店の方から仕入れにやってきました。こうして双方とも大満足な時を過ごしたためその後の人間関係は急速によくなり、テッチちゃんも拒否されることなく仲間に入れてもらえるようになりました。テッチちゃんもみんなと楽しく遊びを続けていくためには、他人の気持ちが変わり自分の役割を果たすことが大切だということに気づいたので

す。
保育者も遊びのなかでの子どもの育ちをどう見ていくかについて改めて考えてみる
ことが大切ではないでしょうか。

ポジティブサポートの世界(2)

〈その人中心〉という意味を考える

村田 愛

ポジティブサポートは、障害をもつ人のために生まれたものです。しかし、障害だけに焦点をあててその人のことや将来を考えていくものではありません。ポジティブサポートは、「その人」に焦点をあて、建設的に現在から将来を考えて行く作業です。人は多面的であり、その人の多面性や可能性／現実を見てみるこ

とが、まず大切な一歩だと考えます。ポジティブサポートは、その人が「その人らしく生きる」ことを目指すものです。つまり人として「自分が、あるいは、誰かが生きる」ということを考える人であれば、必ず通じるものがあると信じています。そしてなんらかの形で、ポジティブサポートの根幹を感じていただけれ

ばと思います。

言葉が差別？

私がアメリカで特殊教育を勉強していた頃、言葉に気をつけることの重要性について社会の関心も高く「言葉」自体が何かと話題にのぼっていました。特に差別にあたるような言葉については、いつも議論され使われる表現が変わり続けています。(色々な人種や様々な言葉を話す人がたくさんいるアメリカだからこそ、言葉の持つ意味やその使い方も世の中の状況に応じて変化して来たのだと思います。)

たとえば、Handicapは、差別語であるとして使わなくなっていました。そして、Disabled Person(障害者)という言葉もその人の持っている障害だけに焦点がいてしまう言葉で、その人の持っている人間性が見えないのはおかしいと言うことになりました。一九九〇年代には、まず大切にするべきことは「その人

The Person」というのが主流になりました。だから、表現も「人」が最初に来て、そして、その人が障碍を持っているという「The Person With Disability」という表現が使われるようになりました。

その頃はまだ、私自身、言葉や表現が変わるのも大切だけれど、繊細になり過ぎ「言葉だけ」に気を使うのは如何なものかと漠然と感じていました。それは、差別にあたる言葉を使わずに丁寧な「正しい」言葉を使っている人と話していても、内容的に差別的な感覚を覚えることもあったからです。また、それと同時に、知っていて「無意識に」使ってしまう言葉によって人を傷つけるのは、確かにいけないことだと、「繊細」になることの必要性を肯定していました。使う言葉／表現は、必然的にその人がどの様に「自分」、そして「その言葉」の意味を捉えているかを示すからです。

私の障害はあなたです

大学院に通っている頃、『私の障害はあなたです』というキャンペーンポスターに出会いました。それは、教授の部屋の壁に貼ってあったポスターでした。その時は、私自身も「誰かの障害」になり得ることに驚き震える感覚を覚えました。その時のキャンペーンポスターでその言葉『障害』という言葉を使っていたのは、障害のある人でした。その時どきとしたのは、障害自体が「障害」なのではなく、「人」が障害という、そこに訴えられている意味にでした。

何をもって「障害」といえるのか。そして、それと対照的にあるような、「普通」とは、何を持って言えるのか。それらを考えていた私にとってのテーマを、『私の障害はあなたです』と短い言葉で、改めて投げかけられたのです。漠然と概念的に考えていた時に、その「障害」という言葉と、「あなた」という言

葉を目の当たりにし、よ
りいつそう自分の問題に
なったのです。そして、

そこには、訴えている人

が見える。だからこそ、より新鮮であり重く強く響くような感じでした。そして、不思議な気持ちよさもあったのでした。「言葉だけ」に気を使うことにちよつとした違和感を感じていたのが、このポスター『私の障害はあなたです』に出会い、私の中で「何が違和感を感じさせていたのか」が、形になったような気がしました。

人が障害？

問題は、使う言葉や表現だけではなく、私が誰かの障害になり得るということであり、あなたが誰かの障害になり得るということです。

わたし自身も誰かの「障害」になるとしたら、どう



いうことなのか。

何が「障害」になるのか。

誰でも誰かの「障害」になる危険性があるような気がするのにはなぜなのだろうか。

これらを考えることが私にとっては大事なことでした。

あるテレビ番組で、障害のある人の生活をドキュメントタッチでみせた番組の中で、彼女は「自分の手足の身体的な障害は、現在の技術と工夫で乗り越えて自分らしく生活している」と嬉しそうに言っていました。一人暮らしをしていて、お料理する時、足で包丁を器用に使いこなしていました。彼女が運転できるように改良された車を運転し、出かけている姿も映っていました。しかし、彼女は『私は障害を毎日感じる。問題は実際の私の障害ではない。私の障害は、「心がバリアフリーでない」ことなんだ』という意味のこと

を言っていたのです。

心のバリアフリー？

ここで使われている「障害」を考えてみると、まず思い浮かぶのが、「生きづらさ」です。では、どういう時に、「生きづらさ」を感じるのでしょうか。「生きづらさ」は、自分が自分を肯定できない時や、まわりの方が自分を肯定していない／否定しているように感じる時に、重くのしかかって感じるもののような気がします。そして、それは、自分が大切にしたいことが脅かされている時とも言えると思います。

人は、人をも価値付けようとしたりします。人を自分の安心感のためにファイリングすることもあります。そうすることで「その人」を理解したと思ってしまう傾向があると感じます。むしろ、そうすることで「その人」を理解できないことが、肯定できる場合も

あるのでしょうか。それは脅かされないように、自分を
守る為に本能的にしてしまう行為かもしれません。し
かし、価値付けることも、自分の安心感のためにファ
イリングする行為も、人／相手を傷つける危険性があ
ります。そしてそれらの行為は、自分と相手との関係
性や可能性を殺してしまうこわさがあるのです。現実
の「その人」の姿がみえなくなり、「その人」への理
解のさまざまになるからです。

障害になり得るものは、わたし／あなたの価値観？

障害になり得るものは、人が無関心であることや、
思い込みや固定観念をもって「十分知っている」と
思ってしまうこと。わかっているつもりになって、一
面的にしか見えないことなのかもしれません。

それは、わたし／あなたの作った壁であり、枠であ
り、心のバリアーでしょう。短絡的にその人を自分の
概念の中で決めつけてしまったら、その人は心を閉ざ

してしまおうでしょう。決

めつけられたから「心を

閉ざす」ことで、心のバ

リアーを作るのでしょ

う。それと同時に、決めつけてしまう行為が、もうす

でにこちら側のつくったバリアーとも言えると思いま

す。

また、「障害」は、「わからない」と突き放されたよ
うに感じることも、でもあるかもしれません。しかし、
問題は知る必要のないこととして、自分から遠ざけて
しまうことで誰かを傷つけることです。そこで重要に
なるのは、想像力です。

このように考えると、障害は障碍をもつ人だけが
知っている感覚ではないと思います。生きている人々
がなんらかの形で「生きづらさ」であったり、「自分
らしさ」を否定されているように感じたことがあるの
ではないでしょうか。障碍をもっている人が弱者であ



り、「普通」と言われる人が守るべき対象ではないのです。生きている私たちすべてが「生きづらさ」「障害」を持ちうるのです。

反対に、まわりの人に自分らしさを認められ、自分の気持ち尊重され、他の誰でもない一人の人間として肯定的に関心をもたれる時、どんなにか自分が自分らしく生きることが誇らしく思えるでしょう。そういう場と時間を作り出すのが、ポジティブサポートなのです。ここで、ポジティブサポートの生まれた背景についてご紹介しましょう。

ポジティブサポートの生まれた背景

D・r・ベスIIマウントが、私の大学でのクラスにゲストスピーカーとして来ました。彼女が特殊教育に感じていた疑問やポジティブサポートを完成させるまでの経緯を実体験で話してくれました。

ポジティブサポートは、一九八七年ベスIIマウント

が博士号の論文としてまとめたものです。彼女には、障害を持ったきょうだいがいました。そこで、彼女はまず、「専門家」と呼ばれる人に疑問を持ちます。ベスIIマウントのお母さんが出会った専門家たちはなんらかの概念をもとにその息子の可能性や将来を語る場にあり一方的に「告げられる」「感覚を覚えたようでした。意見の尊重などという概念が存在しないように感じたそうです。

彼女のお母さんは、息子のミーティングに呼ばれる度に、ミーティングのあり方に不満を感じていたようです。「なぜ母親の発言権も保証されていないように感じる形でミーティングが行なわれるのだろうか」。

そのミーティングに息子本人が呼ばれることはありませんでした。「なぜ、息子の将来を考える場に、本人が呼ばれないのか」。出席者は息子に学校で関わっている先生や専門家とお母さんだけでした。しかし、子どもも成長するにつれて、自分の為に自分で主張した

い気持ちが強くなるでしょう。「息子の将来を考える時に、なぜその子どもに聞いてくれないのだろうか」。誰にでも、様々な関係性があります。そして、家族の思いも別々に存在します。「彼の多面性を考えれば、彼に関わる人たち全てが、専門家と呼べるのではないか」。

そして、ポジティブサポートを形にしていくなかで、彼女は専門分野を一つに絞るのではなく、哲学、心理学、社会学、コミュニケーションなどのいいところをミックスしたら、それぞれの「人の多面性」、「その人の生活／現実」をより理解できるのではないかと考えました。それらの専門家を集めて、それぞれの専門性を生かしつつ、完成したのがポジティブサポートのセッションのあり方です。

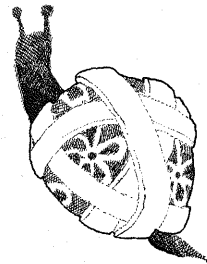
ポジティブサポートが大切にしていること

ポジティブサポートは、「その人らしく生きる」こ

とを目指すものとして生まれたいものです。誰もが、自分らしく生きたいと願っているでしょう。

可能性を追求し、視野を狭くすることなく多面的に物事を見る力が、「その人らしく」生きることを考えることを可能にします。人間は多面的で多様な可能性を持っています。それを何かに限定することは、他の可能性を見落とすことだし、多様な可能性を持つ「その人」を否定することになってしまうのです。

ポジティブサポートは、「その人」に焦点をあて、その人の現実から出発するものです。それは、その人をもつ多様な関係性と切り離すことはできません。なぜなら「その人らしく生きる」ということを考えることは、まず、その人がどういう人か、全体像、多様性を描き出すことだからです。そして、建設的に現在か



ら将来を考えて行く作業だからです。

ポジティブサポートは、参加者全員が尊重される場です。他の人が「その人」を価値付けたり、なんらかの評価を下すものではありません。ひとり一人が、それぞれ尊重されます。

この考え方は、障碍の有無に関わらず生きている私たちすべてが「自分らしく」生きるために重要なものなのです。ポジティブサポートがもつ可能性が、誰かの可能性に影響を及ぼしていると思うのです。

今まで述べたように、人は関わりの中で生きているからこそ、人の表現の仕方・理解の仕方・関心の向け方／関わりの持ち方が、人の生きやすさ／生きづらさに影響を及ぼしています。人と出会った時に無意識の内にバリアを作ってしまうこと、自分が誰かの障害になり得るということに意識を向けてみるのが、社会の中で生きている誰にも必要な作業のような気がします。ポジティブサポートは、人を理解するというこ

との奥深さと、自分の中での変化に目をむけるということ、そして、想像力ゆたかに建設的に考えることの重要性を気付かせてくれました。これらは、重要な発想の転換でした。

人間として肯定的に関心をもたれることで、自分が尊重され、「自分らしさ」を認められる感覚を持つのでしよう。その時に、「自分らしく」生きることが誇らしく思え、生きることの意味を見出せると思います。

それぞれ皆「自分らしく」生きるということが、大切だと考えています。

(ポジティブサポート研究室主宰)

子どものいる風景(3)

今、子どもたちのあそび場は

—ドイツ・ハンブルク市のあたらしいあそび場—

小林 美実

今回と次回の二度にわけて、新しい屋外のあそび場について書いてみたい。

屋外のあそび場については、二〇〇二年十月号の「冒険あそび場」で、第二次世界大戦後に広まったあそび場を紹介した。いま日本でも、わずかではあるが冒険あそび場やプレーパークがある。少し大きい公園の片隅によくある児童公園や

幼稚園・保育所によくみられる、木材を組み合わせて高い塔やゆるるつり橋やたれさがるロープなどをつけた小屋風の大型固定遊具、綱にぶらさがってわたるケープル、木の間にはられた太い綱や大きな網なども、その影響を受けた遊具だろう。これら冒険・プレーパークでのあそびは、子どもたちにとっては大変魅力的であり、興奮させ



られるものばかりだ。しかしここでのあそびには、多少の危険を伴うのも事実であるが、その危険を克服するスリルは非常にエキサイティングだ。このようなあそびやあそび場が今の日本では歓迎されにくくなっている。もっぱら安全第一で、しかも受身で体を動かさないでも、スリルだけを十分味わうことのできる巨大遊具が商業ベースの遊園地には沢山あるし、人気でもある。ただしこの様なあそび場は、たまに行く特別な娯楽施設、遊園地なのである。

子どもたちが、できれば家の近所で、勿論無料で、日常的にあそべるような場所が、本当に楽しいエキサイティングなあそびができる所だったらどんなにいいだろう。そこはどんな所で、どんな遊具があったらいいのだろう。子どもたちがあそびたくなる、あそびが作りだせる、あそびの仲間ができる、そんなあそび場を考えてみたい。あそび

を忘れてしまった大人にとって、そんな場所を想像するのはむずかしいかもしれないが、今、あそび場を作り提供できるのは大人。しかしあそびを創るのは子どもであることを忘れてはならない。

子どもは広い空の下、ひろびろとした所に出るとどうするか。まず、その広さを体いっぱい試みかけて確かめるように走り出すだろう。そしてその子も笑い顔になるのが面白い。ひとしきりかけまわると、まわりをみまわす。「なにか面白いものみつけ」、である。だからそこに子どもの好奇心、探究心のエネルギーを受けとめて、豪快なあそびを生み出せるような場所、そして遊具やしかけがあったらどうだろう。そんなあそび場を、私はドイツで発見した。そこは残念ながら街中にある小さな児童公園ではないが、どのような規模のあそび場であれ、共通するものが沢山ここにはあると感じた。

二〇〇一年、十月号では、私がハンブルグ滞在中何度かおとずれた市の中心にある大きな市営の公園での催し、子どものための「音、音楽、あそび」のフェスティバルについて、少しふれた。この公園は大変広く、いろいろなエリアがある。ちょうど五月六月は花の季節。中でも多様な色、大ききで一面に豪華に咲きほこる石楠花はみごとだ。巨木の下に群れて咲く、小さな青や紫や黄色の花々は可憐で美しく、新緑の木々の茂みの中では、盛んに小鳥のうた声が聞こえる。大きな池には、噴水が踊り、周りのテラスや芝生のスロープでは、もう仕事をリタイアしたと思われる年齢の人々が、コーヒーを飲みながらゆったりとすごしたり、散歩したりしている。頭にスカーフをかぶり、小さい子どもを何人か連れて芝生ですごしているイスラム圏の国から来た人々もよくみかけた。これが普段のこの公園で見られる、子どもた

ちが学校や幼稚園などに行っている日の風景である。はじめのうち、子どもの声も聞こえず、私はこの花々の奥に、エキサイティングな子どものあそび場が新しく造られていた事に気づかなかつた。しかも休日といえ、近郊の古い町、森、田園地帯をぶらついていて、この公園の週末の子どもたちがあそぶ様子を知らず、ここでは私はすっかり老人の仲間入りをしていたわけであった。

フェスティバルの時だった。会場になっている池のまわりの芝生の広場、バラ園、野外音楽堂、森をまわって帰りかけたとき、子どもたちの楽しそうにはしゃぐ声が聞こえてきた。この公園にある立派な日本庭園の裏からだつた。急いで行ってみると、幼児から小学生ぐらいまでの子どもと、その付き添いのおとながいっぱいいて、子どもたちが活発にあそびまわっていた。そこには子どもが公園というと必ず置かれている固定遊具、たと

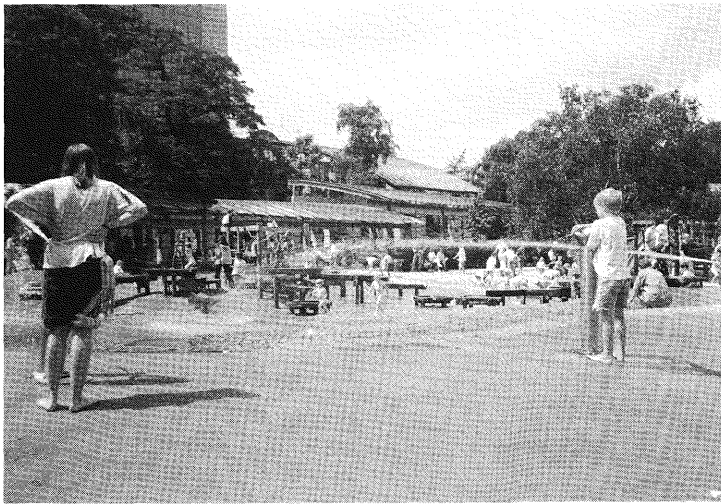
えばブランコ、滑り台、砂場などの遊具は勿論、プレーパークにあるようなものも見当たらない。まず、目の前に広がる水のおそび場の面白さに思わず笑顔になってしまった。まだ気温が二十度というのに、すっ裸であそぶ子ども。多分夢中になってあそぶうちに、びしょびしょになってしまったのだろうか。水のなかの柵のような一本橋を目でたどっていくと、その先には妙な木造の家がいくつか建っている場所がある。入り口のない家、壁が太い綱でできている家などさまざまだ。その右手の広場には、黄色の高い山が、茶色の山々を伴って、二つにそびえている。これまた天辺から水が流れていたり、山脈の部分の上部には水溜りもあるように、子どもが水しぶきをあげている。そして山の右下の広場にあるいくつかの固定遊具も大変ユニーク。長い鉄板のビヨーンとうなって波打



▲兄が手こぎポンプで水を出すと、弟が手で水を受けて喜んでいた。水は木の溝を伝わったり、そのまま石だたみを流れて、下の水たまりへ入る。井戸のまわりは、びしょびしょだ。

つ廊下風遊具。太い縄が輪になっていつぱいつりさがっているものなど。どれもスリル満点なあそびができる。多分日本では許されないのではないか、と思った。

まず私がみたのは、広い変化に富んだ水遊びのエリア。子どものあそび場に水場をつくって幼児でもあそべるようにした公園は、日本でも多く見られるようになった。しかしこの場所はまったくちがっていた。まず水場全体がフラットでない。なだらかな起伏あり、でこぼこがあり、だからあちらこちらにいろいろな水の流れがあり、水溜まりがある。プールのような泳ぎはできないが、それ以外の、小さい子どもたちがしたいと思う水のあそび、水とのふれあいが、思いきりできるところなのだ。なだらかな広い坂一面にさらさらと気持ちよくきれいな水の流れているところでは、一、二歳の子どもが



▲大きい子どもに人気の水鉄砲。右から水を飛ばしている子どもと競争を始めようとしている子ども。水あそびの場所が起伏に富んでいることがよくわかる。



▲むこうの通路（これは市の会議場などへ通じる廊下）の下から流れて来る小川。小さいダムが2つ作ってあった。泥水の中では、妙な道具を動かして、盛大に水をかきまわしていた。

水にそつとさわったりピシャピシャたたいたりしている。やがてその流れにすわってにっこりして、母親を見る。母親も楽しそうに笑顔を返す。兄が手こぎポンプの井戸で水をこぎだすと、弟がその水の気持ちよさそうに手で受けて喜んでいる。水は、木製の長短の溝を伝わって、あちらこちらに流れていく。その先の水溜まりに落ちるところでは、子どもたちが水の中でよくやっているあそび、水をかけあったり、とばしたり、おいかけごっこをしたり、しぶきをあげてはねまわったりしている。公園の横の通路の下から、土を少し掘っただけの溝が水が流れてくる。コンクリートや石でかためてないから、子どもたちが少しだけ流れを変えたり、小さいダムをつくったりできる。その流れの先は、泥水の溜まり場だ。この中で、円盤型の遊具にのっ

て、この泥水を盛大にかき回している子どもたちがいる。

水が流れ込むしかけはもつとある。少し大きい子どもたちが一番好きなあそびは、水鉄砲。低い柱の上に取り付けられた丸みをおびたピストル。

これが水鉄砲で、少し高くなったところに数箇所とりつけてあった。水の飛び出す力は半端でない。しかも上下左右に少し動くようだ。まともな体に当たると痛いだろうが、決してほかの子どもに当たったりしない。付き添いの大人たちが多いこともあるだろうが、(ドイツの大人は今も決して甘くない。他人の子どもにも、大人にも、臆せず注意する) 混んでいるといっても、結構空間があるのも幸いしていると思うが。木の柱や石だたみをねらって、あてっこが始まる。猛烈に飛ぶ水の下をくぐりぬけるのもスリル満点のあそびだ。お父さんたちにとっても水鉄砲は魅力的だ。子ども

がいなくなると、待つてましたとばかり大人がとりついて、嬉しそうに水を飛ばして笑いあっている。このあそび場では、子どもも大人も、知らない者同士がすぐあそび仲間になってしまう。あそびの楽しさを共にする仲間が自然にできてしまうようだ。楽しさを共有する、とはこうゆうことなのだろう。

ちよつとした木製の高台や長短の一本橋が水の中にある。そこでも子どもたちはいろいろなあそびをしている。高台の上ではおしゃべりをする子どももいる。ゆつたりまわりを眺めたり、日の光にあたるのを楽しんだりする時間をすごせる場所があるのもいい。

このあそび場を考えついた人、デザインした人は、どんな人だろう。きつと子どもの時、いっぱい水遊びをし、その楽しさを今も忘れていない人なのだろう、と思った。(元宝仙学園短期大学)

子どもと笑い(2)

今井 和子

はじめに

近年、子どもの笑顔や笑い声が少なくなっているのではないだろうか。いろいろな保育所で乳児保育の観察やビデオ撮りをしたり、多くの支援センターで幼い子どもに関わる機会をもっているが、乳児の楽しそうな笑い声を聞いたり、よく笑う子どもに出会うことが少なく、そのことが大変気がかりであっ

た。

豊かなsmallやlaughter（以後「笑い」）は、心身の健康、滑らかコミュニケーション能力の育ちを促すばかりではなく、肯定的な自己表現や言葉の獲得にも重要な意味をもつ。と同時に子どもの自我の確立にも大きな影響をもたらすのではないかという仮説のもとに、共同研究グループをつくり、調査活動を行ってみた。そこで今回は、そのアンケート結果

に基づき「子どもと笑い」についての私の考えを述べてみたい。

研究の方法

「子どもと笑い」と自我の育ち」に関するアンケートによる実態調査を行い、分析考察を行う。

(1) アンケートの作成とその内容

① ○、一、二歳児を受け持っている保育所の保育士を対象にしたアンケート

a クラス規模（子どもの人数、保育士の人数）

b その中にあまり笑わない表情の固い子、笑い

声が出ないなど、気になる子がいるかどうか

c bの質問で「いる」と答えた子どもについて、性別、年（月）齢、おはしゃぎ反応、視線

の共有、笑い声、自我のめばえと自己主張の有

無を問う。

d 笑わない子への保育者の対応について

表1 アンケート調査の実施

①保育所

地 方	園 数	保育士数
北海道	19	41
関東（除く東京）	103	184
東京都内	67	70
中部 北陸	20	42
四国 九州	5	17
計	214	354

②支援センター

配布したセンター 30箇所
 回収（協力）センター 25箇所
 スタッフ 38名

② 子育てセンターのスタッフへのアンケート

a スタッフについての質問（資格の有無、経歴

年数等）

- b) d)については保育所と同じ
 (2) アンケート調査の実施

結果と考察

アンケートの中の設問「あなたのクラス（支援センターに通う子ども）の中に、あやしたり、ふざけたり、おはしやぎ遊びなどしても、あまり笑わない気にかかる子がありますか？」

① 保育所の場合：四月、クラス担任になった時点から考慮し、記入してもらおう。全休人数はクラスの子どもの数

② 支援センターの場合：通ってくる子は不特定のため、一日平均何人位の親子がくるか、を問い、その子どもの人数をそのセンター全体の子ども数と、捉えることにする

その結果「いる」と答えた人数はつぎの通りである。

笑わないと思える子どもについての実態調査

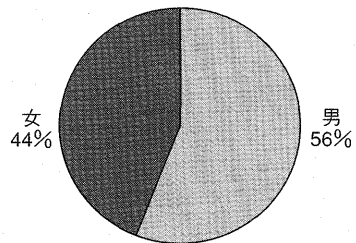
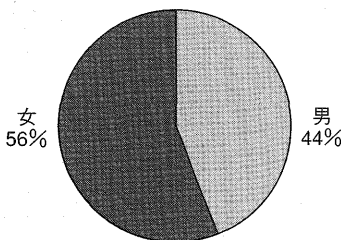
性別

①保育所

男子 (78)
 女子 (99) 計177人 (6%)
 —全体2966人—

②支援センター

男子 (37)
 女子 (29) 計66人 (12.6%)
 —全体525人—

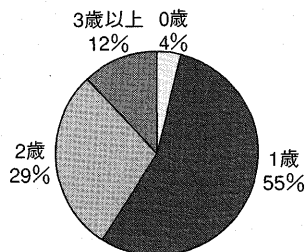


I 笑わないと思われる子どもの人数（年齢別）

①保育所

年齢	人数	全体人数	割合
0歳	6	246	2.4%
1歳	91	1329	6.8
2歳	48	1033	4.6
3歳以上	19	358	5.3
計	164	2966	5.5

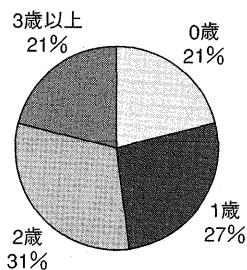
※性別表による笑わない子どもの合計と、年齢別表の合計の数の違いは、年（月齢）に対し記入もれがあったためである。



②子育て支援センター

年齢	人数	全体人数	割合
0歳	14	80	17.5%
1歳	18	226	8.0
2歳	20	166	12.0
3歳以上	14	53	26.4
計	66	525	12.6

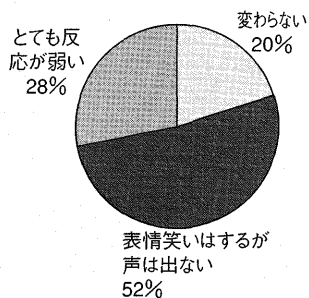
※複数のスタッフが支援センターに通う子どもの中で「笑わないと思える子ども」についてチェックしている所があったため、対象児の性別、年（月齢）が一致していた子どもは、同一の子とみなし除いた。



II 笑わないと思われる子ども全体の結果

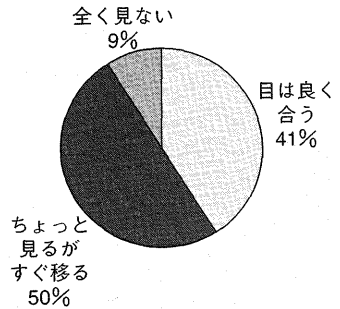
あやしたりふざけたり、色々なおはしゃぎ遊びをすると表情は変わるか

	保育園	センター
変わらない	34	16
表情笑いはするが声が出ない	92	22
とても反応が弱い	48	26



Ⅲ スタッフや保護者が、目を見て話しかけると目は合うか

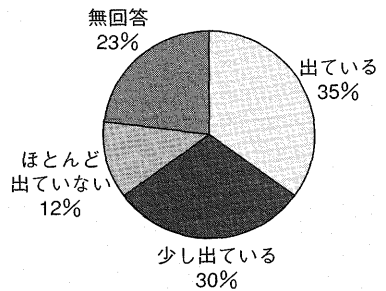
	保育園	センター
目は良く合う	72	27
ちょっと見るがすぐ移る	87	33
全く見ない	16	6



Ⅳ (A)

言葉や、言葉に代わる喃語はでているか

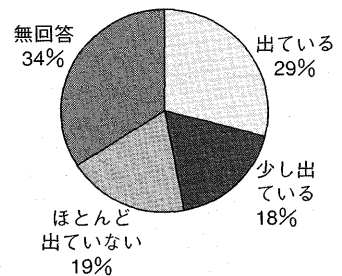
出ている	85
少し出ている	72
ほとんど出していない	29
無回答	57



Ⅳ (B)

指さしは出ているか

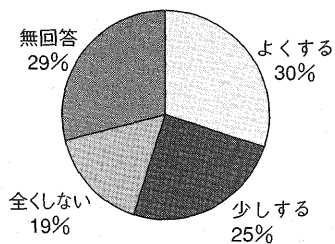
出ている	70
少し出ている	43
ほとんど出していない	45
無回答	85



V (A)

その子が1歳半～2歳半位の年齢にたっている場合、気に入らない事があると、怒ったり、泣いたり、「イヤ」「ダメ」という拒否の言葉を発し、自己主張しますか。

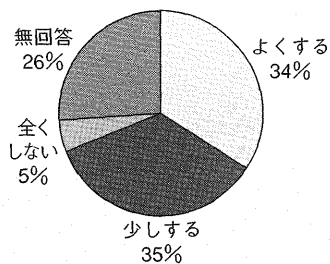
よくする	75
少しする	60
全くしない	38
無回答	70



V (B)

自分の名前を呼ばれると、手をあげたり、振りむいたり、自分が誰であるか、わかっている反応をしますか。

よくする	83
少しする	84
全くしない	13
無回答	63



今回の研究目的の①に当たる「笑わない子どもが増えているか？」は、初めての調査でもあり、過去のものとは比較することはできなかったが、例えば、保育所の場合、各年齢の入所児童総数と笑わない子どもの割合をだすことによって、その実態を知ることとはほぼ可能になったと思う。その結果は五・五パーセントであった（I①参照）。

保育者が他の子どもたちと比較して「笑わないと思われる子ども」を見出すことは、可能ではないかと調査に踏み切った。が例えば、家庭では笑うが、園では笑わない子、保育者と子どもの関係性、クラス的环境のありようなど厳密に考えると、数値の信頼性は不十分である。が保育者の目で捉えた今回のアンケートの結果をみると、かなり深刻な状況になっていると考えられる。

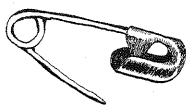
保育者は子どものことを「このごろよく笑うようになった」などと、笑いを心身の健康のバロメー

ターとして表現する。乳児期の笑いは未来に向けて発達が促されていくという証でもある。生後二ヶ月に表れる「社会的微笑」は人への基本的信頼が生まれるはじめたことを意味するものである。乳児の重要な発達課題である「笑い」の乏しい子が保育所に六パーセントいるということは、サイレントベビーの問題と同様、子どもからのSOS発信と受け止めなければならぬ。

園児と子育て支援センターに通う

在宅の子どもとの比較

支援センターでの「笑わない子ども」の数値については、センターに通う子どもが不特定のため、保育所のような割合を出すことはできなかったが、センターに一日平均何人位の親子が通ってくるか、を問い、その子



どもの人数を全体数とし、笑わない子どもの割合をだしてみたなら、保育所と比較にならない十二・六パーセントという結果が出た(Ⅰ②参照)。センターの場合、アンケート対象者数も少なく、保育所と比較するのは無理がある。がアンケートの結果に見るように、在宅の子どもに「笑わない子ども」が圧倒的に多いことの理由を明らかにすることは重要であろう。在宅の母親が殆ど一人で育児に携わらなければならぬ事態に比べ、園児は毎日いろいろな大人や子どもと関われること、すなわち、人間関係の多様さがまずその大きな要因になっていると考える。表情笑いはあるが、笑い声が出ない子どもについて「笑わない子ども」の中には、smileは見られるが、声をたてて笑うこと (laughter) がない子どもが五十二パーセントいることは驚くべきことであった(Ⅱ参照)。「笑いは、情動の表出で言語的な行為ではない」という先入観があり、声をたてて笑うこと

が子どもにとって大切な発語訓練の一環である」とことが正高信男氏の研究で明らかになっている。乳児の首のすわりが、笑い声ができるようになる条件であり、発声力(喃語)を促すためにも、たくさん声を出して笑うことが重要である。家庭でも保育所でも子どもが泣いたときには、対応せざるを得ないため世話をするが、おはしゃぎ遊びなどして大人も子どもも声を出して笑いあうようなゆとりが、生活になくなっていくことがその要因であろう。

笑いを引き起こすものは「目」

笑わない子の中に、目を見て話しかけても「全く見ない」(九パーセント)、「ちょっと見るがすぐ視線を移す」が五十パーセントいた(Ⅲ参照)。

生まれたばかりの乳児が、特に注意をはらうのが人の顔であり、とりわけ目に注目することは周知の通りである。「目は感情の窓」、見つめあいによって

相手と感情交流し笑いが生ずる。すなわち笑いを引き起こすものが「目」であり、さらに見つめあいから共同注視（共鳴しあう）という関係が育つていく。やがて自分の見たものを、大好きな人にも一緒に見て欲しい。（「驚きや喜びを分かち合いたい」という気持ちが強まり、人と気持ちを響きあい伝えあうというコミュニケーションが発達する。

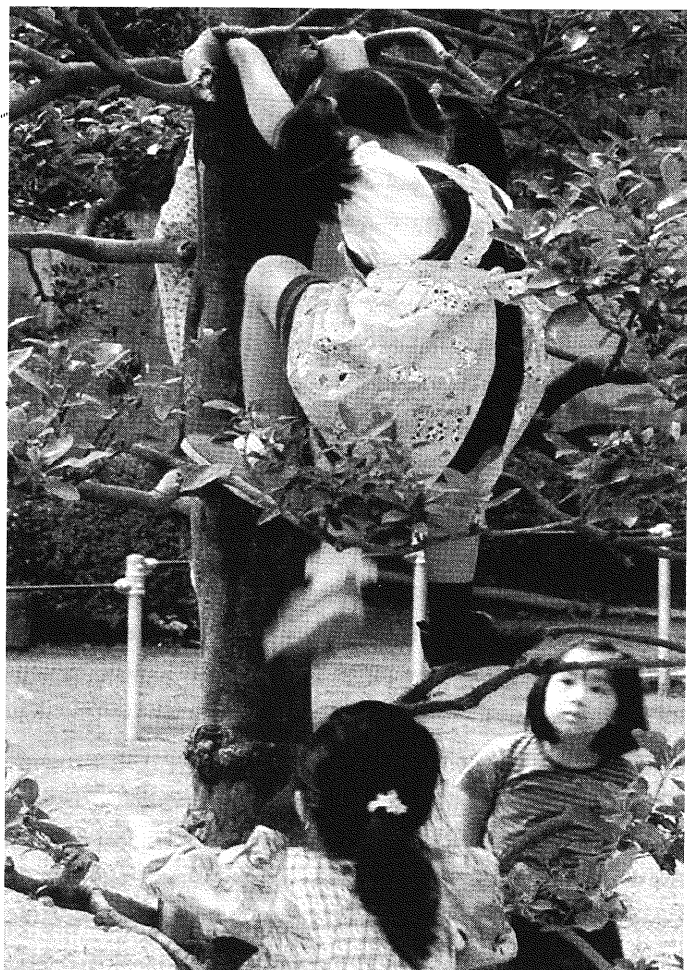
今回、笑いの弱い子に視線の共有が不十分であることが明らかになった。これは、笑いを回復するには何から始めたらよいかを考える示唆でもあると思う。

保育所においては、ことに養護の大切さを心して関わることはないか。三歳未満児の生活においては、世話（養護）に費やす時間はかなり多い。おむつを換えたり、授乳をしたり、これらの世話をする時こそ、ひとり一人の乳児と触れ合える大切なコミュニケーションの機会である。その時を毎日どれ

ほどの気持ちをこめて、あやしたり、ふざけたり、楽しんでいくかにかかっていると思う。

乳児の待機児が多く、定員の二十五パーセント増入所している多くの保育園にあつて、保育者の疲労感や困難さは想像以上のものがある。がまずは日常的に行う養護をとおして、乳児の人への信頼感（自己信頼や他者信頼）や人と一緒にいる喜びを育むことが、今何より重要ではないかと考えさせられた次第である。

（東京聖徳短期大学）



ある日

撮影・田中 千尋





障害をもつ幼児の保育(11)

—この子と出会ったとき—

津守 真 (M)

津守 房江 (F)

ゲスト・玉木喜美子 (T)

言葉のない子の「コミュニケーション」

前号から続く

ことばを話さないS子さんが、白雪姫の劇遊びを演
出する話を前回しました。S子さんは毎日、隣の幼稚

園に行きます。

子どもの行動を理解できないまま

付き合ううちにその子の意図が見えてくる

F S子さんは何か物を作ったりしますか

T あの人はずっとも視覚で捉えることが得意なんです。一番最初に驚かされたのが、愛育病院に行った時のことです。あそこには大きな振り子時計があるんです。で、夏休みに病院に行った時に、S子さんは小麦粉粘土で色んなものを作ってたんですけど、きれいな振り子時計を作ったんですね。それがとっても緻密に出来てて、その話をお母様にしたら「実は愛育病院に行つて待合室にかかつているその振り子時計をとつてもよく見てた」つて言っていたのが、三年くらい前の話なんです。非常に手で物を作る事が得意な人です。本当に一つのことをかなり完全に自分でやりきるまでやれる人なんです。継続して。

M 僕とつき合うようになってからもそういうことが色々あります。四色か五色、折り紙をごそつと持つてくるんだけど、その中から選ぶ色が決まっています、それをちぎつて床の上に置くんです。初めは何やってるんだか分かんなかった。かなりの日数が経つて後に

分かったことは、それをオモチャのフライパンの上に乗せてお料理をする。それが分かるのに僕も随分時間がかかりました。次には本物のお料理になっていくのね、それが。

T そしたらもう熱心にお料理です。本物の。

M しかも細かいんだよね。

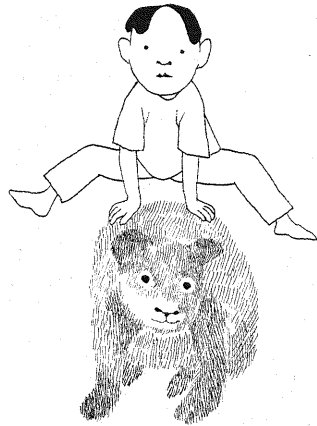
言葉でない表現を受け取るうとする大人がいること

T 最初の頃は即席のクッキーミックスで熱心に作っていたんですけど、今はもうそれを粉の調合からやるんです。自分で。こういう風な物を作りたいというイメージは彼女の中にはつきりあるんですね。だからこの間、男性の保育者がつき合った時に、この人ではらちがあかないと思つたみたい。お料理の得意な人のサポートが必要だつていうことは、S子さん自身も分かっています、自分でも粉を調合して試みるけど失敗もします。ものすごく固くて、形も美しいものが

出来ちゃったりして。女性のスタッフだとS子さんのやっていると横から口を出しながらも共同で作り上げるみたいなことを、何度も何度も体験しているんで、今は本当にお料理を熱心にやっています。

M それから学校の庭になると姫リングゴが実って、この前はこの姫リングゴでジャムを作ろうと思って他の子で成功したことがあったもんだから私はS子さんにもそれをやろうと思って、職員室の脇のガス台の所に持ってきて作ろうとしたら、S子さんの考えがあつてね、お砂糖をどう入れるとか、その他に何をどう入れることがちゃんと考えがあるのに僕には分からないもんだから、あつちこつちの引き出し開けたり、それじゃない、あれじゃないって本人はね色々やっている。そのうちにもうなんだかわけ分かんなくなっていました。

T でもちよつと、姫リングゴのシロップ漬けみたいなのはできましたよ。S子さんのお料理の棚を用意して



あげたいなと思うぐらいです。

S子さんは周囲の出来事を取り入れながら

自分独自のものにしていく

F 前回の話は、S子さんが白雪姫が死ぬ場面を何回もやったことでした。おじいちゃんの亡くなったことを、劇遊びによって再現して理解するという話でしたけれど、お料理もそういうやりかたで自分のものにしていくのかしら。

T そうですね。結構S子さん自身の造形的な遊びのモチーフってというのは、教育テレビや、子ども番組でやっていることを引つ張ってきて、あの人が取り込んでやることは多いですね。

F ああ、そうですね。

M うん、それもあるのね。僕なんかテレビを見ていないからどこでそうなるのか分かんないけれど、そこからアイデアを得ているかもしれない。Sさんはそれを自分のものにしてる。

T S子さん独自の活動になっていくんですけどね。

なかなかそこが他人に理解してもらえないんですね。

M 言葉を話さないが、でも心の中では色々なことを考えている。それを外に出そうとすると大人からは評価されない。それをちゃんと分かってあげて、ある程度ずつ満たしながら生活出来るようにすると、もつとどんどん生活が豊かになるでしょうね。全体の教育の中でも、そういうことがいっぱいあるんでしょう。

一日を充実させて学校から帰っていく

F Sさんは今何年生ですか？

T 今、三年生です。

F Sさんがこれから先、どういう風に成長するのかは分からないけれども、Sさんの気持ちや表現を受け取って、理解したいと思う人が周りに一人でも増えることによってこの人は生きられる、そう考えていいのかしら。

T 生きやすくなるんでしょうね。Sさんらしく生きやすくなると思います。

M そうでしょうね。だから本当にS子さん自身がやるうとしてることを手助けしたいっていう思いでいる大人がいたら、あの人の表現はどんどん豊かになると思うんです。そこですよ、本当に今のSさんにとってのことが出来ることってのは。

Sさんが毎朝ね、学校に来る時の意気込みって

うのを僕は毎日感じてる。あの意気込みをどうやって受け取れるだろうか。

T 本当に嬉しそうですね、今。

M そして一日を実に充実させて帰って行くのね。でもその間では今日話してきたようにしょっちゅう分かんなくてとんちんかんやってる。

必ず通じるという自信と信頼

T S さんが大人に分かってもらえなくても、あとに引かなくなりましたよね。相手の大人が分からないうっていうことに対して「じゃあこれではどうだ」というような、「これなら分かるか」ということをね、諦めないで伝えるようになりましたね。それは嬉しいことです。その人で分からなければ別の大人を連れてくるっていうことで、S さんは諦めないんですよ。そこはとっても嬉しいですね。

M そうね、必ず通じるはずだっていう自信を持って

るのかな。

T そういう信頼がありますよね。そこが大きく成長した点かなと思ってる。

F それはいいですね。

M それは言えますね。

T だから結構S さんの言うことがすぐ分からなくっても、こちらもそんなに焦らないで、「え、何？」っていうことを聞き返せたりとかね。分かりたいと思ってるっていうことを伝えるとS さんがそのことに対して応えてくれるんですよ。そういう信



頼はお互いの間にありますね。

F 必ず伝わるという自信と信頼ね。これはいい。

T どうしても隣の幼稚園に遊びに行けないこともたまにはあるんですよ。以前はそういう大人の手を振り切って自分で門を出ていったのがね、このごろは二日ぐらいそういう日があつて、すぐにS子さんの要求に応えることができなくて「まあ、もうちょっと待ってて」っていう時に、あの人そういう出方をしなくなつたんですよ。今ダメでも後で行ってもらえるところか、それは嬉しかったですね。

M そのお隣の幼稚園がお休みの日、もうそういう時は行かないのね、自分でね。それがあらかじめ予告されてなくつても、その日になつて今日は行かれないって事があつても前はそういう時に非常にかっかりしたけれど、今はそういうことがあれば、それじゃあ今度は学校の中でどうするかで考えて。

F 今ダメでも崩れないのね。

T そうですね。S子さんとは喧嘩が出来るようになりましたね。

F 「どうしてこんなに分からないのよ？」っていう感じ。

T そうそう。

N君の「油揚げと小松菜ものがたり」

M S子さんのように、これだけ心の基礎が出来ていると、成長していく途中で分かつてもらえない事があつたとしても、それはそれなりにあの人他の人に分かつてもらう努力を色んな形でやつていって、ちゃんとそこから自分の生活を作っていくんじゃないか。それができるようにこれから後の子ども時代をしつかり育てていきたいと思えます。

F S子さんの話を聞いていて、私はあのN君のことを思い出しました。N君は二十歳の成人式を終えているわけだからもうずっと大きい青年です。S子さんは

ど色々な能力は持っていないように見えるでしょう。そしてやっぱり言葉が出ない人なんだけれども、このお母さんが「この子は言葉で伝えることができなから、自分でお使いに行つた先で何を買つてくるかによつてその子が望んでることが大体分かる」と言つてました。ラーメンをいっぱい買つてきたり。ある時小松菜と油揚げを買つてきた。もともとそんな物は好きじゃないのにどうしたんだろうと思つてみると、先頃おじいちゃまとおばあちゃまの所の娘さん、つまり伯母さまが亡くなつてとても悲しんでいらした時、お母さんがそれを慰めようと思つて菜っぱと油揚げの煮浸しを持っていつてあげた。そしたらその子は材料を買つてきて、刻んで煮ろつて言つて、煮たらそれを持つておじいちゃまとおばあちゃまの所へ行こうつていうことを態度で示したつてお母さんがおつしやるの。この子たちは自分のおじいちゃまやおばあちゃまがかわいそうだつていう思いを伝えたいと思つても、



本当に努力しないと伝わらないんですよ。それが伝わった時には本当にみんなが嬉しくて、それから毎週土曜日になるとその煮浸しを持ってその子は訪ねて行くようになったという話をされました。

それだけ努力するつていうことはそれだけ思いが深いつていうことでもあるんでしょね。悲しいことやつらいことに対する同情心があるんだつて私は思いました。

M 本当にそれはその通りね。N君がそこに行くまで

の期間のあの長さね、毎日毎日それにつき合う時のN君はまだそんなことは全く分からない。こんな風になるなんてことは全く分からないでただひたすら大人から見れば毎日同じように水遊びをしているように見え、あまり価値のないように見えることを続けているで、その中に何かがあるに違いはないと思ってみる時のその時間の長さってのはね、それもまた現実ですね。

分からなくても何かがあるに違いはない

と思つて支え続けた日々

M 何かがあるに違いはないと思つて支える時にはね、人にはそんなに分からないけれども、小さなことで何かを大人も発見しながらやつてるんですね。

こういうときの保育のコツは小さなことを何かがあるに違いはないと思ひ、またごくわずかながらその日にN君が分かってくれそうなことを考え出してね、や。それが積み重なつて僕はいまのN君になつたと思

います。

そして、今、Sさんが他人から分かつてもらえなくても、決して気持ち崩れないで、分かるまで頑張るっていうようなこと、色々と人を変えたり状況を変えたりして提示して相手とのコミュニケーションを作れるということが、これからどういふ風に展開するかとても楽しみです。

F 未来は分からないけれど、N君のような人を見ると、ほかの人から保護されるだけじゃなくて人を支える人にもなつていけるといふ、明るい未来を予感出来ますね。

M 何かがあるに違いはないと思つて支えたそれらが実つてきてね、僕らを驚かしてくれる。

T 本当にそうですね。

現在・過去・未来と解釈ということ

M それでね、僕はある時から『解釈』つて事を言っ

てきたでしょう。解釈というのはね、決して確実にこれがこうだっていう風な断定的なことは言えない。いつでも、そうかもしれないというところにとどまりながら、しかもその中に一縷の真実さはあるんだからそれを手がかりにして次を考えていくんだが、そこに確実さは求められない。それは過去から考えるというよりもむしろ未来から考えていくっていうのかしら。それはいつでもプロセスなのかしら。プロセスというのは過去からのプロセスだけじゃなくて未来からのこともあるわけで、未来を拓いていく、そのことを同時にやりながら過去というものを考えていくというね。

F そうすると過去が生きてくるのね。分らない、変なことやってるわ、と思ってたことが未来と出会った今から戻って考えると意味あるものとして生きてくるんでしょね。

M 大人は非常に一面的だからね、さっき言ったようにね、大人になってしまうと頭が固くなってしまふ。

見方が一方的になってしまつてそれ以上に向こう側から考える柔軟性を失つてしまつて、それで過去だけを考えていて今を解釈してしまうから間違つてしまふ。あるいは未来からだけ考えて間違つてしまふ。その全部が同時に起こつていてね、それを全体から、考えていくんじゃないかしらね。子どもはさっき言ったように、すでに分かっている。

今日は玉木先生有り難うございました。

絵本とともに

— 幼いきょうだいと暮らす —

藤津 麻里

皆さんは、自分の子どもに絵本を買い与えて読む方ですか？ それとも、図書館などで借りてきて読んでやることが多いですか？ うちでは買うのが九割、借りるのが一割といったところででしょうか。私の職業は大学図書館の司書なのですが、図書館の利用者としては、あまり熱心なほうではありません。地元の公共図書館が遠くて利用しに

くいからです。最近、次男を連れて、近くの保育園の子育て支援センターに遊びに行くようになり、そこから少しずつ絵本を借りてきては、子どもたちに読み聞かせるようになりました。でも、そこにはない絵本で「これは読んでやりたい」と思うものは、やはり買って手に入れたい。絵本のガイドブックを参考に、面白そうな絵本や、自分が

幼い頃読んだ絵本をビックアップして、書店に注文したり、次はどれを買おうかとリストを作って楽しんでいきます。

ところで、絵本は普通の家庭ではいったい何冊くらい買っているのが適当なのでしょう？——変なことで悩んでいるな、とお思いでしょうね。もちろん、自分の好きなようにすれば良いのですけれど……。私の実家は小さな幼稚園をやっているため、絵本は何百冊もありました。子育てをしていると、折にふれて、実家にあつたいろいろな絵本のこと 생각이出され、あれも読んでやりたいな、私ももう一度読みたいな、と思うことがあるのです。でも、狭い我が家で際限なく絵本を買い込むことはできないし、あまり数が多すぎるのも、子どもにとつて良いことなのかどうか疑問です。それでも、ある程度、家に絵本が置いてあつて、いつでも読めることは大切だと思うし……。

家のスペースや予算、そして、子どもたちの様子を見ながら、少しずつ買ったり、借りたりしている今の状態が、ちょうどいいのかもしれない。

三歳六か月の長男は、車の絵本が大好き。『とらつくとらつと』『のろまなローラー』『しょうぼうじどうしゃじぶた』（いずれも福音館書店）と、車の絵本を一冊ずつ借りてきてやるととても喜び、毎日寝る前に「読んで」と持ってきてきます。小さな頃から車や電車が好きで、ミニカーの絵本や、『働くじどうしゃ』（小学館）の図鑑を熱心に見ていました。息の長いセットになっているのが『ブルドーザとなかまたち』（福音館書店）。昨年、親戚の子からおさがりで貰った絵本です。『ブルドーザは、つちを けずりとり、たくさん のつちを おして あつめます。シヨベルロード は、ブルドーザの あつめたつちを すくいと り、ダンプトラックまで はこびます。』……と

いうように、工事現場でいろいろな車が働く様子が、簡潔な文章と精緻な絵で描かれています。地味な絵本ですが、長男はこれが大好き。一歳七か月の次男も、何度も見ているうちに好きになったようで、この本を見ながら「ちゅち、ちゅち（土）」というようになり、外でパワートショベルなどを見かけても「ちゅち！」と言っています。ページの中に小さく描きこまれた小犬を探すのも、二人の楽しみの一つです。長男は、場面ごとの小犬の台詞を考えて、「うわ！、レーキドーザだ、逃げようっと」なんて、小犬を演じて楽しんでいます。

次男の方は、少し前までは、『おつきさまこんばんは』（福音館書店）や『いないいないばあそび』（偕成社）などの赤ちゃん向けの絵本が好きでしたが、兄の影響もあって、少し長い物語性のあるものも楽しんでいます。『わたしのワン

ピース』（福音館書店）では、「わたしに あうかしら」という言葉が出てくるたびに、「アッ！」「ンッ！」などと、相の手のように可愛い声をはさみます。これは長男が始めたもので（「にあうかしら」なんていうおすまじした言葉がおかしいのでしょうか）、次男も真似しているのです。絵本を読んでもらいながら声を出したり、言葉を覚えて一緒に台詞を言うのも楽しいですよ。『おつきさまこんばんは』では、「ごめん ごめん」 「だめ だめ」などと、絵本の中の言葉を言うようになりました。

長男の方は、絵本によってはお話を丸ごと暗記してしまうほどで、子どもの記憶力には本当に驚



かされます。『ゆかいなかえる』（福音館書店）や『三だいの機関車』（ポプラ社）のページをめくりながら、字が読めるかのようにすらすと暗誦するのです。この子はまだ文字はほとんど読めませんが、読めるようになったらどう変化するのでしょうか。文字を覚えてたの子どもによくみられる、一文字ずつ拾って読むぎこちない読み方で、同じ本を読むようになるでしょうか。今の読み方とそれとは、どうつながっていくのか、あるいは一種の断絶が起きるのか……今から楽しみです。

『ゆきのひ』（偕成社）も、子どもたちが好きな絵本です。黒人の男の子のピーターが、雪の中で遊ぶ一日を描いたものです。雪の上のいろいろな足跡をつけてみたり、雪だるまを作ったり、木の枝に積もった雪を棒でつついて落としてみたり、雪の山を登ったりすべったり……。この絵本を読んでいると、作者のキーツが、子どもの一人遊び

の楽しさを本当によく知っているのがわかります。一見、とりとめなくも見える小さな遊びの連続。雪が降ったことへの喜びと驚き。幼い子どもの世界がとてよく描かれているように思えます。（余談になりますが、最近のテレビの子ども番組は、大人が小手先でチョイチョイと考えただけのひねくれたものが時々見受けられるのが残念です。子どものためのクリエイターになるのは、決して簡単なことではないのだと思わずにはいられません）

次男は、ピーターの頭の上に雪のかたまりが落ちるところが好きで、「どしん！」と言ってニコニコしています。雪が降った日には、「きゅっ、きゅっ、きゅっ」と、絵本に出てくる言葉を口に出しながら、雪を踏んで楽しんでいました。長男は、ピーターのように「ゆきだんご」を作って、服のポケットに入れて家に入るんだと言い出して

(絵本の中では、ポケットの中に雪玉が溶けてなくなってしまう、ピーターはがっかりするので) 困りました。

この絵本は、私にとっては母との思い出の本でもあります。暖かい静岡で育った私には、雪は憧れでした。四歳くらいの時でしたか、サンタクロースに「ゆき」のプレゼントをお願いしたので。残念ながら、クリスマスになっても雪は降りませんでした。そのかわりにこの『ゆきのひ』の絵本が届いたのです。こんな手紙を添えて。

「ゆきは もってこられなかったので、

ゆきのひの えほんにしました。

セント・ニコラスじいさんより」

私自身には、この時の記憶は残っておらず、このエピソードと、プレゼントの主が母だったこと

を後から聞かされて育ちました。雪をリクエストされて、母がどんなに頭をひねったことだろうと、親となった今は微笑ましく感じられます。母は十年以上前に亡くなったので、もう話を聞くことはできないのですが……。

『ゆきのひ』の絵のシックな印象が、大人になった私の心にも残っていたように、子どもたちの中にも、今楽しんでいる絵本の記憶が何かの形で残ってゆくことでしょう。親子で絵本を読む時間が、子どもたちにとって幸せなものであるように、そして、素敵な絵本との出会いがたくさんあるようにと願いつつ、これからも自然体で絵本を楽しんでいけたらと思っています。

(会津若松市在住)

木と子どもと遊び

田中 千尋

はじめに

小さな子どもは木が好きです。何もない広場でも木が一本あれば、いつの間にか遊びが生まれます。夏は木陰をつくり、雨の日は屋根になります。秋には葉っぱや実を落とす木もあります。木は子どもたちにとって遊びのきっかけをつくる天才です。また、子どもたちも、何でもない木から遊びを考え出す天才です。遊びとは子どもたちにとって生活その

ものであり、友だち作りの機会であり、コミュニケーションの重要な手段です。

私は昨年の四月から、たびたびお茶の水女子大学附属幼稚園を訪れて、子どもたちの遊びの様子を観察してもらっています。特に自然物（木、草、虫、石や砂など）を仲立ちとした人間関係の形成という観点で、子どもたちを観察してきました。興味深い行動が多く見られたのですが、今回はその中でも、一本の木を中心にした人間関係について、少し

書いてみたいと思います。

スズカケの太木と子どもたち

私は小石川植物園の森に、よく子どもたちを連れていきます。あそこには大きなスズカケの木があります。スズカケの木というのは、東京の街路樹によく見られる、あのプラタナスの木と同じです（街路樹にプラタナスがよく植えられるのは、空気の浄化



絵・田中 千尋

力が強いからだそうです）。子どもたちはあのすべすべした樹皮の、大きな木が大好きです。中には、子ども五人で手をつないでも届かない胴回りの、大きな大きな木もあります。

どの学年の子どもでも、その周りで一時間でも二時間でも半日でも、飽きもせずに遊んでいます。その中に一本、どういうわけかちよつと斜めに立っている木があつて、不思議なことにその木が子どもたちには一番人気があります。その木の周りに集まつては散つていきます。斜めになっているので、がんばれば登れそうな感じに見えるのでしょう。しかし所詮登れるわけはなく、ちよつとよじ登つてあきらめてしまいます。その木に近づいてみると、根元の樹皮が剥がれて、ツルツルになっています。きつとたくさんの子が登ろうとしたのでしょうか。

大きな幹なのでかくれんぼもできるし、「だるまさんがころんだ」の鬼の木にもなり、自然と子ども

たち同士遊びの輪ができます。秋には「スズカケ（鈴掛け）」の名の通り大きな立派な実をつけます。この実は直径が三、四センチもあり立派ですが、種子と綿毛がびっしり集まったものです。割ろうとすると、ちょうどガマの穂のように爆発して、体積が十倍にもなります。これが子どもたちには愉快でならないのです。しかしどういふわけか、この実は晩秋になつても枝にがんばり、なかなか地面に落ちません。完全な球果はめつたにないので、最初に拾つた子はもう英雄です。たちまちその子を中心に輪ができます。

どの例を見ても、一本の木が子どもたち同士の間関係の形成に一役買っていることがわかります。

園庭の自然環境

附属幼稚園の庭はいつも美しく整っています。よく作られたというよりも、子どもたちの活動を考え

てよく考えられた自然環境を持つ園庭だと思えます。ここにもたくさん木があつて、それぞれの木がその特徴によつて、子どもたちの活動を支えています。三歳児の保育室の前にある木には、よく耳をつけている子がいます。ぬいぐるみをおんぶした女の子に「何が聞こえますか？」と聞いたら、「何も聞こえないよ」といって、また耳をつけています。山の上のイチヨウの大木の根元を、三人の男の子が木の棒でしきりに掘っています。「何の穴ですか？」と聞いたら、「○○くんが根についたドングリに虫がいるって言つたの（意味不明）」と返ってきました。

さて、五歳児の保育室の前に一本の木があります。それほど高くもまた形のいい木でもありませんが、この木は子どもたちにとって非常に特別な存在です。枝の高さや間隔が良く、小さな体の子どもたちが木登りをするのに絶妙な枝振りなので

す。無論、こんな都合のいい木が自然にできたのではなく、子どもたちが登れるように、上手に剪定してあるのです。私はこの木を中心にした子どもたちの行動に興味を持ち、何度か観察する機会を持つことができました。

木登りの師弟関係

最初に私が観察したのは九月下旬、夏の終わりの頃でした。天気もよく、残暑も一段落していたので、ほとんどの子は半袖にエプロン姿で、園庭で遊んでいます。その中に五歳児の女の子が二人、木登りを始めました。この木は、最初の足場になる枝が子どもにとっては微妙に高く、登り始めるのに少々勇気と決断がいるようです。

ひとりの子（A子）はかなり慣れてい



るらしく、足場の選び方が確実で、ホイホイホイと登っていきます。もう一人の子（B子）はまだ「初心者」で、最初の一步に難渋しています。それを見ていたA子は一旦地面に降りて「指導」を始めました。最初の一步を手伝ってあげたり、「その枝に足をのせて」とか「葉っぱじゃなくてちゃんと枝をつ

かんで」という具合にアドバイスを与えています。この状況では一つの動作に対する技量の差がはっきりしているのです、一時的に師弟関係が発生しています。この状況は二十分ほど続きましたが、ついにB子は最初から自力で、三番目の枝まで登れるようになります。この時点で師弟関係は解消され、同等の立場で木登りができます。ただ、B子にとっては「A子が木登りを教えてくれた」という思いが残り、A子にとっては「私がB子に登り方を教えた」という満足感が残るでしょう。これは木が育んだ人間関係と言えると思います。

その日、この二人は一旦木登りをやめてしまったのですが、しばらくして木登りを教わっていたほうのB子が別の子を連れてきて、今度は自分が教える役にまわっています。新しい師弟関係の発生です。後日、A子にインタビューしたところ、実はA子自身も年中（四歳）の頃から別の子に木登りを教えて

もらったことがあるという話でした。こうして一本の木を仲立ちに、次々と新しい人間関係が生まれていくのです。

木の上に人がいる

二回目に観察したのは、十月中旬の秋の始めでした。「木登りの木」は常緑樹なので、秋になっても紅葉や落葉はありません。つまり、この木の周囲では一年中同じ環境で遊べるということです。この日は、観察者にとっては不可解な行動が見られました。

木の上や周りで遊んでいたのは、年長五人の女の子と年中二人の男の子です。男の子と女の子は一緒に遊んでいたのではなく、独自のグループだったようです。男の子二人は木に登ろうとする仕草はしきりに見せていましたが、木の下でピョンピョン跳びはねるだけで、結局登ろうとはしませんでした。奇



妙だったのは女の子のグルーブの行動です。

このグルーブの子はどの子も木登りに慣れていました。入れ替わり立ち替わり木に登っては降りていきます。最高で三人の子が同時に登っていましたが、木のとっぺん（といっても三番目か四番目の枝が実質的な終点）まで行くと、更に上に顔を向けて何か叫んでいます。さりげなく近づいて聞くと、「おい、その人——！」とか、「おばあちゃ——ん！」とか、「降りてきて——！」と言っています。叫ばずにブツブツ言う子もいるので、更に近づいて聞こうとすると、申し合わせたようにだまっしてしまいます。木に向かつてしゃがんで、目を閉じて合掌している子もいます。この奇妙な行動のわけを知りたくて、何人かの子に聞いたのですが、「だれもいないよ」「知らないよ」と黙秘権を行使します。どうも、この木にまつわる、子どもたち独自の「物語」のよくなものがあるようです。木登りを通じての一種の

「秘め事」を共有することで、独特の人間関係を作っているようです。

ビデオによる調査の失敗

三回目の観察をしたのは、十一月下旬の秋の終わりでした。この日は木のまわりで遊ぶ子どもたちの声と姿を記録しようと思い、高感度マイク付きのビデオカメラを用意していました。しかし、マイク感度が良すぎたのと、遊びの支障になることを恐れ、木から遠くの園舎の壁に設置したのが失敗でした。雑音がひどく、とてもプロトコルをとれる音質ではありませんでした。また映像のほうも、子どもの姿が小さ過ぎて、細かい動きが判読できず、何の意図を持った動作なのか不明でした。屋外で活動する子どもたちの会話を録音する為には、かなりの工夫が必要です。独立の電源を持ったトランスミッター付きの小型コンデンサーマイクと、FMラジオ

オ、それに録音装置を組み合わせる必要があります。です。

終わりに

今回の観察は、理論的な仮説に基づくものではなく、またしっかりした方法が確立したものでもありません。また観察人員や機材、観察日の設定も十分で、まずはそのあたりからしっかり計画する必要があります。一つわかったことは、一本の木がいろいろな子を集め、遊びを支え、即席のコミュニティを形成するのに非常に大きな役割を果たしているという事実です。幸いこの木は常緑樹なので、四季を通じて同じ環境での観察が可能です。今後幼稚園の先生方と連携をとりながら、更に研究を深めたいと思います。

(お茶の水女子大学附属小学校)

手づくり活動の楽しさ

すばらしさ(3)

浜本昌宏

子どもからのプレゼント

海外旅行をしたときのことです。

隣の座席の方が、嬉しそうに、「これ、孫がつくってくれましてね」と、首に下げたかわいらしいペンダントを見せてくださいました。

「お守りのようなものですがね」との言葉の中に、家族の温かい絆を感じたものです。

ある園では毎年のように、お家の方へのプレゼントとして紙粘土でネックレスやペンダントを子ども達がつくっています。手馴れていることもあって見事です。

つくり方は簡単。紙粘土を小さく丸めたり、伸ばしたり、たたいて薄くしたものをハサミで切ったり、いろいろな形をつくり、乾いたところで着色し、模様を描いた

りします（ポスカなどの色彩マーカーで）。

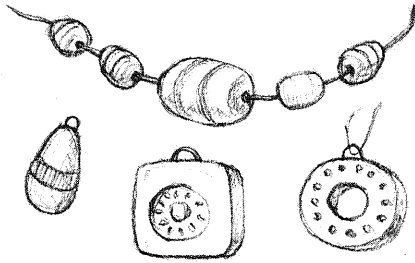
模様は自由に描きます。子どもらしさやハットするような見事なものが必ず生まれます。

図のように球状のものには、竹串などで紐通しの穴を開けておき、ペンダントの場合は、ゼムクリップを中心に

埋め込み、頭部にすこしのぞかせておきましょう。

彩色もよく乾いたらつや出しのスプレーをかけます（画材店にあり）。紐は、いろいろな種類がありますので、選んでください。

輝くプレゼントの出来上がり。紙袋に包み、お手紙を添えて、渡しましょう。



さあ、園の行事などで、参観に来られた、お家の方の首や胸に、子どもの作品が輝いていると、みんな大喜び。親どうしも会話が弾むでしょう。

（元三重大学）

床 下

佐藤 寛子

メアリー・ノートンの「床下の小人たち」は、おとなになってからも、思い出すと読みたくなる私の大好きな話だ。安全ピンを洗濯干しに利用したり、ミシンの糸巻きを椅子にしたり、針は身を守る剣になったりと、床下に住む小人たちは、床上に住む人間がいらなくなつて捨てたものや、何の気なしにホイと置いたもの

を、夜中にこっそり持ち出して、自分たちの生活に役立てて暮らしている。ある日、床上に住む男の子に目撃されたことから、少しずつ床下の世界の存在が、人間に知られるようになり、小人たちは住みにくくなり、追われるようにして外の世界に旅するようになる。

私にとって、何より魅力的なのは、この話の

冒頭である。ケイトという小さな女の子に、その家の二階に住むおばあさんが語って聞かせる話は、今もなお古い家の床下にそうした「借り暮らし」と呼ばれる小人たちがひっそり暮らしていることをうかがわせるものなのだ。

さて、私が今勤めている幼稚園は、今年の十一月で百二十七歳になる。今の園舎で保育を行うようになって、七十年以上。古くなってところどころ修理はしているが、ほとんどが建てられた当時のままである。時々ガス管の工事で業者の方が入る床下は、おとんでも立ったまま十分歩けるほど高さもある空間なのだそうだ。私は一度も足を踏み入れたことはないのだが、聞くところによると、人間にはあまり好かれない類の昆虫や小動物がたくさん生息しているらしい。私が密かに出会いを夢見ている「借り暮らし」の小人たちの情報は今のところない

のだが、きっと彼らは姿を上手に隠して、そこに暮らしているに違いない。

そんな担任の熱い思いがあるので、必然的に私の受け持つクラスの床下には、「借り暮らし」の小人たちが住んでいるということが普通のことになっている。

床下に耳をすます

幼稚園を巣立ち、今は立派な(?)小学一年生になった子どもたちが、まだ四歳の年中組だった頃のことである。三十五人が一同に集まる降園前の時間、楽しく遊んだ後の冷めやらない興奮と熱気と、必要以上に大きいみんなの声で、保育室は騒然としていた。それ以上の声で



静めようとするほどの気力も体力も私にはない。

「こんなに騒々しいと、下に住んでいる人たちは、きつと迷惑だろうな」

ボソツと言った私のつぶやきに、即座に反応したのが、C子だった。

「せんせい、ようちえんのしたにだれかすnderの?」

いくら信じていることとはいえ、未確認の情報をそのまま子どもたちに伝えるわけにはいかない。

「みんなが帰った後にね、遅くまで残ってお仕事をしているときどきだあれもないはずなのに、カタツって物音がしたりするのよね」

「ほんと? やっぱり、ようちえんにもおぼけがいたんだ」

おぼけや妖怪の話題には目が無く、幼稚園中

のこわい本をかき集めては読んでいるY夫が、すぐに私たちの話題に乗ってきた。

「うーん、でもね。不思議なんだけど、あんまり恐い感じがしないの。おぼけじゃないんじゃないかな」

事実なのである。遅くまで仕事をしていたり、お盆や暮れの業者も来ない休みの時に目直にあたり、ひとりで職員室にいたりすると、廊下の奥の方や、どこかの保育室から物音が聞こえてくる。誰かいるのかと思つて覗きに行くと、もちろん誰もいるはずなどない。私は決して肝がすわっている方ではない。むしろ臆病で恐がりなのだが、幼稚園での、この物音に関しては、初めから恐いとか、気持ち悪いといった感覚はわいてこなかった。

「なんかすんでいるのかなー?」

そう言つてK夫が腰掛けていた椅子から離れ、

床に突っ伏して耳をすまし始めた。さつきまで大騒ぎだった周りの子どもたちは、いつの間にか静かになって、彼の様子を見守っている。

「はなしごえがきこえたみたいなきがする」

K夫がささやくように言うと、

「ほんとー？」と言って何人かが立ち上がり、そのまま寝そべって床に耳を当てた。

「いるわけないじゃん。だってようちえんは、一階だてだぞ」

T夫はみんなを説得しようとするが、

「こびとなんじゃないかな。ちいさいんだよ。きつと」

と言うC子に誘われるように、彼もまた寝そべって床下の様子に耳をすませた。

三十五人の子どもたちと一人のおとなが、保育室に寝そべって床下に耳を押し当てている様子は、きつと外側から見たら、かなりおかしな

光景であつただらう。

床下の小人たち

このように、床下の小人たちは、担任の強い思いにかなり誘導されて、子どもたちと共存することになった。その後、小人の話がお帰りに毎回出るというわけではなく、私も取り立てて小人の話に触れることはなかった。けれど、誰かが思い出したように、小人の話を始めたり、誰もいない保育室で、ひとりこっそり床下に耳を当てている人があつたりと、床上に生活しながら、床下に思いを馳せる感覚が、クラスの中に自然に流れているのを感じることが多くなった。そして、子どもたちが教えてくれる小



人たちの世界は、私が想像していた以上に豊かで楽しいものであった。

小人の家族編成についてであるが、話をする子どもによって、さまざまに変わる。一人つ子で三人家族の時もあれば、両親、兄、姉、弟、妹、祖父、祖母の九人からなる大家族になることもあった。身長は、おとなの小人で、私の手の親指くらい、子どもの小人は子どもたちの親指くらいあるようだ。小人の世界でも、兄弟げんかをしたり、お父さんが酔って帰ってきたりすることがあるらしく、子どもたちは、自分たちの生活を重ねて話をしてくれることが多かった。

また、幼稚園の生活の中でも場面場面で小人が登場してくるようになった。靴下が片方なくなつて、私に注意して探すように言われ、一生懸命探すが出てこないで困っている人に、

「きつと、こびとさんが、お布団につかっているんだよ」

と声をかけてる人があったり（これには、少し困ったこともあったが……）、おしゃべりが激しいお弁当の時間に、

「こびとさんがびつくりしちゃうよ」

と静かにするよう声をかける人が現れたり、小人の存在で、生活は楽しくなり、私も助けられることが多くなった。

小人たちの引越

四月から年長組になり、保育室も変わること
を子どもたちに伝えた三学期のある日、

「こびとたちは、どうなるの？」

という話題が子どもたちから出た。年中組のこの保育室の床下に残るのか、それとも自分たちと一緒に、年長組の保育室に引越すのか。こ

の頃には、小人の話をする人はほとんどなく、私もその存在を忘れかけていたので、子どもたちの中に、小人たちの存在がすっかりあったことを知り、驚き、ちよっぴり反省した。もとはと言えば、わたしのまいた種である。現実のいそがしさに、床下へ思いを馳せる時間を、私は持たずに過ごしていた。

メアリー・ノートンの床下の小人たちも、子どもとは上手く共存できていた。けれど、子どもの様子から、小人の存在を知ったおとなたちが、小人を驚異に感じ、追い出してしまふ。現実の世界に生きながらも、イメージの世界を楽しむ、自由に行き来しながら生活している子どもたちに対し、おとなになると、どうして、自分たちの住む現実にはか目を向けられず、その他のことを受け止めることが難しくなってしまうのだろうか。

さて、私たちの小人は、結局、年長になった子どもたちと一緒に、年長組の保育室に引越すことになった。そこで一年を過ごし、子どもたちの卒業後は、再び引越しをし、今は私と一緒に年少組保育室の床下で暮らしている。そして、年少組の子どもたちも、小人の存在を受けいれ、床上と床下でうまく共存しているようだ。

お帰りに、みんなで歌をうたっているとき、あるいは、お弁当のとき、ついつい大声になって、気がつくくと大騒ぎになっちゃったりすると、子どもたちの誰かが、口に入差指を持って行って、「しーっ。したに、こびとさんがいるから」と、声をかけたりしている。



小人たちと仲良く暮らしていくために

日々の生活に追われていると、ついつい、いろんなことに気がつかなくなることが多い。現実の世界に生きることに一生懸命になることは大切なことだが、度が過ぎると自分を見失うくらい力みすぎてしまうことがある。自分たちの生活の場以外にも、横を向けば、たくさんの方が生きているのだ。踏みしめている地面の下や、見上げた空には、多くの生き物が暮らしているのだ。

床下にひっそり暮らす小人に思いを馳せることで、今生きている自分たちの生活を少し違った角度からみる事が出来るのではないだろうか。

思えば、床上の小さな子どもたちの生活も、床下の小人たちと似ているのかもしれない。生

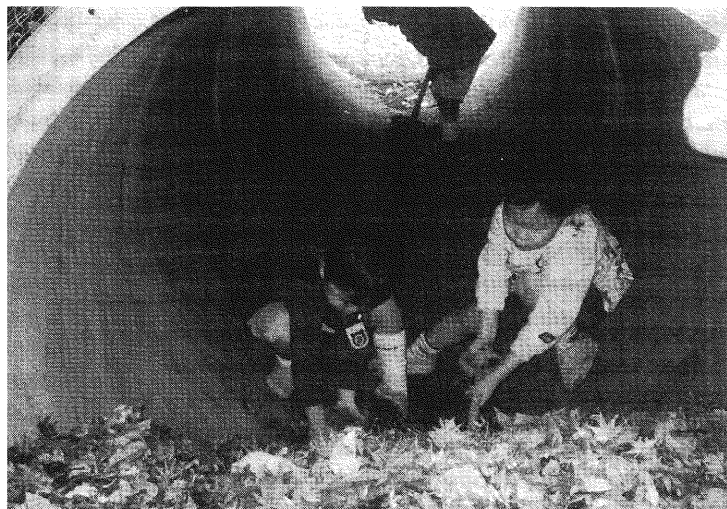
活の一部始終、おとながいなければ生きていけない彼らの暮らしは、まさに、「借り暮らし」

の小人たちである。おとなから与えられた場やものを、子どもたちは、イメージの中であそびに上手に活かす。砂場の砂は、おいしいケーキやプリンになり、一枚のごさは、劇場の客席や空飛ぶ絨毯になったりするのだ。子どもたちが、ともするとおとなである私たちより柔軟なものごとを捉え、理解していけるのは、現実の世界に生きながらも、もうひとつ別の世界を持つているからだろう。

床下の小人たちと、床上の小さな子どもたちと、私たちおとなと、それぞれが仲良く共存していくためには、お互いの暮らしに思いを馳せ、イメージできる柔軟性を持ち、それぞれの暮らしを認めていくことが必要なのかもしれない。

◀床上に暮らす子どもたちのファンタジーな空間

——お山のトンネル——



最近、幼稚園の軒下に、不思議な動物が入り込んでいくのを見たという噂が流れた。猫よりもひとまわりからだが大きく、太いしつぽを持ったその動物は、都会では、見かけないある生き物だ。私が信じる小人の正体は、彼（彼女）であったのだろうか…。いずれにしても、床下の小人たちの暮らしが今までのように壊されることなく、しあわせに続いていくことが、私の一番の願いである。なぜなら、小人たちのしあわせは、そのまま、子どもたちと私たちの幸せなのだと思うからである。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

編集後記

三月初めの寒い日に、ある保育園に行きました。午睡の後のこと、四歳児の担当のS先生がうれしそうに話してくれました。ここ数日、昼寝の後の着替えが進まなかったのですが、今日、お日様の当たるところに子どもたちが集まっているのを見ていて、着替えをする場所が寒かったのだ、と気がついて、「そこ、お日様が当たって暖かいね。そこで着替えてもいいよ」と言う、すぐに着替えを始めたんです。S先生は、子どもとお日様とのつながりを発見できたことをとても喜んでいました。

倉橋惣三は、「太陽の子ども」の

中で次のように書いています。

*

草も木も太陽に向かつて伸びます。幼虫も日光を慕って匍はい出します。蝶も日なたに舞い、小鳥も明るい梢に歌います。生長と活動とは日光の下に行われ、健康と歓喜とは日なたの賜です。生長の子、活動の子、健康の子、歓喜の子は、皆太陽の子どもです。…太陽は、自分の光の中で元気に育っていく子どもたちを見て、にこにこしています。『子どもの心とまなざし』フレール館)

*

見ると、バジャマを脱いで着替える真つ最中です。裸の背中がくっつくように並んでいて、それがちょうど日だまりに背中を寄せあっているように、私には見えませんでした。(仲)

幼児の教育

第一〇二巻 第六号

(二〇〇三年六月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十五年六月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二丁目一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五丁目一

発売所 株式会社 フレール館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一四一九

☎〇三―五三九五―五六一三(営業)

☎〇三―五三九五―五六〇四(編集)

振替 〇〇―一九〇―二二―一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレール館にお願いします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

0・1・2歳児の子どもたちが毎日潤いのある生活を送れるようにするための保育実践シリーズです

乳幼児を迎える保育室の環境
づくりのヒントが満載！



0・1・2歳児の 赤ちゃんHOIKU実践シリーズ 1
笑顔がいっぱい

わくわく保育室

- ・乳幼児のためのかわいい誕生表、保育室を明るくする壁面飾りのアイデアを数多く紹介しました。
- ・保育室をすてきな空間に変える生活環境便利グッズの数々には、牛乳パックで作る「みんなの帽子入れ、キルティング布を使った「遊べるおむつ替えマット」、段ボールと布の「どこでもまど」など、身近な素材で簡単に作れるものばかりです。
- ・「保育のワンポイントアドバイス」つき。
- ・作り方と型紙もついています。

阿部 恵 編著 AB判 96頁 定価：本体2,200円＋税

0・1・2歳児が喜ぶ、手づくり
おもちゃ・プレゼントのアイ
デアがいっぱい！



0・1・2歳児の 赤ちゃんHOIKU実践シリーズ 2
げんきわくわく

手づくりおもちゃ・プレゼント

- ・感触のよさやなめても安全なもの、洗濯のできるものなど、乳幼児のおもちゃが備えなければならない特色と“手づくりのよさ”を生かしたおもちゃ・プレゼント・誕生カードのアイデアを多数紹介しました。
- ・おもちゃを手づくりするには、時間も手間もエネルギーも必要ですが、工夫する楽しみ、完成の喜び、子どもたちが手にして喜んでくれる姿を見るとき満足感、それらに費やした苦勞を吹き飛ばしてくれます。
- ・「保育のワンポイントアドバイス」つき。
- ・作り方と型紙もついています。

阿部 恵 編著 AB判 96頁 定価：本体2,200円＋税

キンダーブックの
フレーベル館



21世紀保育ブックス

これからの保育はどの方向へと向かっていくのか。
新しい21世紀の保育を展望しながら必要とされる諸問題を根本的に掘り起こし、
確実に保育者を導き育て、将来の保育への指針を与える新シリーズ！

最新刊

編集委員 森上史朗 (子どもと保育総合研究所代表)
柴崎正行 (大妻女子大学教授)
柏女靈峰 (淑徳大学教授)

21世紀保育ブックス⑬

子どもの健康を考える

保育に必要な小児保健の基礎知識



巷野悟郎 著 (こどもの城小児保健クリニック)

成長・発達過程にある幼い子どもたちの健康を考えるとき、もう一度原点に戻って見る必要があります。私たちが生物であるということを思い起こして、訪れる自然の変化、そして人とのふれあいの中で、子どもの発育、健康を整理してみる必要があるでしょう。本書は、子どもの健康について、子育ての中で知っていなければならない基本的なことから、考え方をやさしく述べています。保育者をはじめ、子育てに携わっているすべての方への確かな道しるべとなるものです。

B6判・200頁・定価：本体1,200円＋税

〈本書の内容〉

- 序章 生物としての子ども
- 第1章 子どもって何だろう？
- 第2章 〇・一・二歳児と三・四・五歳児
- 第3章 からだの働きを知ろう
- 第4章 子どもの発育と症状
- 第5章 アトピー性皮膚炎と乳幼児突然死症候群
- 終章 子どもと水

既刊本

- | | | | |
|-------------------|--------------|-------------------|---------------------|
| ①新しい教育要領・保育指針のすべて | 森上史朗 著 | ⑦地方自治体の保育への取り組み | 山本真実・尾木まり 共著 |
| ②新時代の保育サービス | 柏女靈峰・山本真実 共著 | ⑧乳幼児期の「心の教育」を考える | 阿部和子 著 |
| ③カウンセリングマインドの探究 | 柴崎正行・田代和美 共著 | ⑨自由保育とは何か | 立川多恵子・上垣内伸子・浜口順子 共著 |
| ④子ども虐待の理解と対応 | 庄司順一 著 | ⑩保育者が出会う発達問題 | 大塚幸夫・前原 寛 共著 |
| ⑤知的好奇心を育てる保育 | 無藤 隆 著 | ⑪保護者の要望をどう受けとめるか | 小笠原文孝 著 |
| ⑥保育者の「出番」を考える | 吉村真理子 著 | ⑫保育所と幼稚園～統合の試みを探る | 吉田正幸 著 |

<以下続刊>

キンダーブックの
フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

定価 五五〇円(本体五二四円) ☆